



源氏物語

第一卷

玉上琢彌 訳注

角川文庫

げん　じ　もの　がたり

源氏物語

第一巻 全十冊

たまがみたくや
玉上琢彌 = 訳注



角川文庫 2207

昭和三十九年五月十八日 初版発行
昭和六十三年七月三十日 三十四版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)八一七—八四五—

営業部(〇三)八一七—八五二—

二—〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

源氏物語

付 現代語訳 第一巻

玉上琢彌一訳注



角川文庫 2207

凡 例

一 底本は、定家自筆本の存する巻はこれを用い、存しない巻で明融模本の存する巻はこれを用い、その他は、池田亀鑑博士の「源氏物語大成」の底本である飛鳥井雅康等筆本を用いる。貴重な典籍の使用を許された所蔵者各位に深謝する。

二 これら底本を改めた場合は、本文の右傍に*印を付し、冊の末に表示する。注意すべき異同は、本文の右傍に*印を付し、脚注欄に異文を掲げ、必要あれば括弧して訳を付した。

三 本文は仮名遣いを正し、適宜に漢字をあて、句読点を付し、会話には「」を付して話者の名を括弧内に小字で記した。作中人物の心を述べた文にも「」を付したことがある。すべて分かりやすくすることを主旨とし、必ずしも統一を計らず、繁雑になることを避けた。また、段落を設け、その要目を脚注欄に掲げた。

四 脚注欄は、段落ごとに要目を掲げ、注意すべき異文を*印を付して掲げたほか、引き歌・故事出典・有職故実などを記し、さらに語義に及んだ。訳文で分かりにくい嫌いのあるばあい、脚注で補うように努めたのである。

五 訳文は、独立して読めるように注意したが、原文から離れすぎないように注意した。読者が原文を味わわれんことを望むからである。

六 既刊の分に収録された巻を参照してほしい場合、この文庫本の頁数をかかげた。

七 文庫本は簡略を旨とするから、原文の美しさ、おもしろさの説明や、時代と背景の説明その他、省略しなければならなかった事が多い。全巻にわたり鑑賞を書き試みた「源氏物語評釈」(全十二巻・別巻二冊・角川書店刊行)を合わせ見られれば幸である。

目次

凡例
解説
系図

三 二 三

本文

校本文
注

現代
語訳

桐壺

一 時めく更衣、ねたまれて、なやむ（いづれのおほん時にか）	二五	二二
二 更衣の家族（父の大納言はなくなりて）	二六	二二
三 皇子誕生（さきの世にも御ちぎりや深かりけむ）	二六	二三
四 若宮の袴着（この御子みつになり給ふ年）	二六	二三
五 更衣、病気で退出し、死ぬ（その年の夏、みやす所はかなき心地に）	二六	二四
六 なき更衣の葬送（かぎりあれば、れいの作法に）	二六	二五
七 帝のご弔問（はかなく日ごろすぎて）	二六	二六
八 野分の夕、瓢負の命婦の弔問 （野分たちて、にはかに肌寒き夕暮のほど）	二六	二七
九 命婦の復命、帝のご悲嘆（命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけると）	二六	二二

一四 源氏、中川に方たがえする（暗くなる程に）

一五 源氏、伊予の介の後妻とあり（君は、とけても寝られ給はず）

一六 源氏、小君によって文通する（殿に帰り給ひても）

一七 源氏、ふたたび中川に宿る（例の、うちに日数へ給ふころ）

空蟬

一 源氏の失望と女の煩悶（寝られ給はぬまゝには）

二 源氏、三度中川にゆく（君は、「心づきなし」と、おはしながら）

三 源氏、人ちがいてまゝ娘とあり（わたどのの戸ぐちに）

四 源氏、老女に怪しまれる（小君ちかう臥したるを）

五 源氏、邸に帰る。両所に三人の思い（小君御車のしりにて）

夕顔

一 源氏乳母を訪い、隣の女から歌を贈られる

（六条わたりの御忍び歩きのこと）

二 病牀の乳母と語る、隣に返歌する（引き入れており給ふ）

三 乳母子の惟光、隣の女のことを報告する

（惟光、日ごろありて参れり）

四 伊予の介上京、その妻と源氏の煩悶（さて、かの空蟬のあさましく）

五 源氏、六条の御方に宿る（秋にもなりぬ）

六 惟光ふたたび報告し、源氏を手引きする

（まことや、かの惟光が預りの）

七 源氏と五条の女と、相互の思い

（女を、さしてその人と尋ねいで給はねば）

一六 二五八

一七 二六三

一八 二六七

一九 二七〇

二〇 二七三

二一 二七三

二二 二七三

二三 二七三

二四 二七六

二五 二七九

二六 二八〇

二七 二八三

二八 二八三

二九 二八四

三〇 二八七

三一 二八七

三二 二八九

三三 二九〇

三四 二九二

三五 二九二

三六 二九三

- 八 八月十五夜の五条の家（はづき十五夜）
 九 女を誘って、某院に宿る（そのわたり近きなにがしの院に）
 一〇 夜、もののけの出現と、女の急死（よひすぎるほど）
 一一 二女を東山の寺に移す（からうじて惟光の朝臣まゐれり）
 一二 三二条院に帰った源氏（人々、「いづこよりおはしますにか」）
 一三 源氏、東山の寺に行く（日暮れて惟光参れり）
 一四 源氏の病氣（まことに、臥し給ひぬるまゝに）
 一五 五条の女の素姓を侍女右近に聞く（九月廿日の程にぞ）
 一六 空蟬たちとの文通（かの伊予の家の小君）
 一七 夕顔の七七日の法事（かの人の四十九日）
 一八 夕顔方の人々の疑惑（かの夕顔の宿りには）
 一九 伊予の介、空蟬と離京（伊予の介、神無月のついたちごろに下る）
 二〇 結語（かやうのくだくしき事は）

若 紫

- 一 北山の行者（わらはやみにわづらひ給ひて）
 二 北山からの眺望（すこし立ち出でつゝ見わたし給へば）
 三 供人の世間話（君はおこなひし給ひつゝ）
 四 小柴垣のすき見（日もいと永きに）
 五 僧都の房に宿る（げにいと心殊に由ありて）
 六 別れのあいさつ（御迎への人々）
 七 御所と大臣邸に行く（君は先づ内に参り給ひて）
 八 若草へ文通（この若草の生ひ出でむ程）

ル 藤壺の宮との密事（藤壺の宮、悩み給ふ事ありて）	一七三	三二五
ロ 北山の人々帰京（かの山寺の人は）	一七六	三二六
二十月に北山の厄死す（十月に、朱雀院の行幸あるべし）	一七九	三三一
三 帰京した若君を訪問する（忌など過ぎて）	一八〇	三三二
三 父宮、若君を訪う（かしこには、今日しも）	一八四	三三六
四 惟光の報告（君の御許よりは）	一八六	三三八
五 若君を迎え取る（君は大殿におはしけるに）	一八七	三三九
六 二条院の若君（二条院は近ければ）	一九〇	三六一
七 若君なき家（かのとまりにし人々）	一九三	三六四
八 若君のその後（やう／＼人参り集りぬ）	一九四	三六五
校 異	一九六	
補 注	二〇〇	
年 立	三六七	
京都図	三六八	
大内裏図	三七七	

解説

「源氏物語」は、女のために女が書いた女の世界の物語である。

和風文化の発生 先進国、大陸の隋や唐の文化の移入に明け暮れた時代が過ぎ、極端な国風蔑視の時期を経て、異国文化を消化した心をもって新たな日本の文化を作り出そうとする機運は、九世紀の末に遣唐使を廃止せしめた。さしも強大と繁栄を誇った唐朝も崩れ去らんとして、大陸の物情騒然たりしことを理由にしているけれども、すでに取るべきを取ったという自信がなければ、廃止にまで至らなかったであろう。

物語の発生 大陸をまねた時代は終り、日本独特の、寝殿造りと呼ばれる広い板敷の建物の中に、畳（今のうすべりのようなもの）を敷き重ね、屏風（びょうぶ）を置き並べ、几帳（きしょう）で囲って、姫は坐する。横に後につらなる屏風は、六曲一双が普通であるが、高さ五尺の屏風には唐絵（からえ）をかき、高さ四尺の屏風には大和絵（やまとえ）をかく。唐絵は中国より伝来した絵を手本にしたもの、屏風絵では多く仙境をかき、中国風の服装の仙人が塵外の山水に遊ぶ図である。そして絵のそこに色紙形（しきしがた）（後の式紙ふうのもの）を貼り、仙境を主題とする漢詩文をかく。大和絵はこのころようやく盛んになったもの、わが国のやさしい風土に和装の人物が点綴され、色紙形には和歌をかく。画中の人物が画中の風物を見て感懐を述べた三十一文字である。

姫は、屏風の絵を見ながら、そばに侍する女房にようぼうに説明を求める。女房は、幼い姫の養育係・家庭教師である。詩文を見、和歌を見ながら、屏風絵の一面一面を追って話しつつける。これが、物語の起りであった、と、私は思う。

歌語り 幼い姫と女房は、唐絵と漢詩文よりも、大和絵と和歌とに親しむ。歌枕うたまくら（よく和歌によまれる名所）、月次つきなみ（行事や季節の移り変わり十二か月）のほか、男女の贈答が屏風絵の主題にとりあげられる。男が歌を贈り、女が返歌する。男は積極的であり、女は男の心をためしている。この男女の贈答歌を色紙形によって読みとりながら、女房は話を敷衍ふさんする。ここに至るまでの経過を摸索し、その歌の時機を解釈し、要すればこの男女の将来を、あるいは結末を想像する。さらに、色紙形に書かれない贈答歌を創作し加えることもあったであろう。かくて物語は、歌を中心として、延長されてゆく。

一つの屏風は、時を変えて、別の姫に別の女房に、物語を新作せしめることもあろう。それらのうち、すぐれているものは、やはり記憶され伝承され、時には記録されることもあろう。

男女贈答の和歌を中心に、物語は生き動き、成長していったのである。

原作者と語り手 屏風絵の新調は、容易ならぬ大事である。一家の吉事に際し、慎重に準備して、製作される。漢学者または職業歌人に嘱して、詩文または和歌を作らせ、画家に命じて詩文にあわせて絵をかかせる。また逆に、えがかれた画に詩文または和歌を新作せしめることもあった。

だから屏風絵については、解説めいたものを、製作に関与した漢学者または歌人が添付するこ

ともあった、と思う。それによりながら女房が物語ることがあった、と思う。

屏風絵のほか紙絵がある。天地一尺数寸を限度とする冊子絵または絵巻であって、口碑伝説説話の類をえがくこともあり、女房によって物語の材料とされることもあった。

物語は、絵を見る姫に、女房が語って聞かせるものであった、と思う。

女房の作品「源氏物語」

はじめは漢学者や職業歌人の解説文によって、女房が女房の言葉、女房の話し口で物語っていたものを、語り手である女房自身が作るようになった。それが「源氏物語」である。

「源氏物語」は、当時の物語の実態に即した技巧の数々をとり入れている。この物語全部が事実である、仮作でないというたてまえを崩さない。若き姫の耳に入る昔話、一家の歴史や偉人の物語の一つとして、「源氏物語」は語られるのである。

「源氏物語」のすべては、女房の語り口である。かつて生きた光る源氏と紫の上のそば近く仕えた女房が、生き残って「問はず語り」（蓬生の巻末参照）するのを、若い女房が筆記し編集したのが「源氏物語」である、というたてまえである。帚木の巻頭（本書五〇頁、訳文二三四頁）は、筆記編集者のことわりの言葉であり、語り伝えた古女房や光る源氏自身に対する批評の言葉である。夕顔の巻末（本書一五〇頁、訳文三二三頁）は、語り伝える古女房自身の言葉である。竹河の巻頭は、この巻の内容の取材源は別である、とことわるのであり、後の太政大臣（嵯峨）に仕えた古女房の物語を筆記編集した、というのである。

巻頭と巻末に限らない。本文のあちこちに、これら女房の言葉をさしはさんであることに、読

者は気づくであろう。読みあげて姫に聞かす女房は、それらの所では声の調子を変えたであろう、と思う。

そして聞く姫は、そばにいて読みあげる女房の声を、筆記編集者たる女房の声と聞き、語り伝えた古女房の声と聞き、やがては作中世界の人物の声とも聞き、いつか作中世界に自己を没入し、読みあげる女房の声を光る源氏の声と聞きなし、膝の前に広げる絵を見入って、いつしか光る源氏と語り合う女君と自分を思いなし、物語の世界に生きるようになるのである。

こうして作者は、理想とする男君女君の生き方を、姫に教えこむことに成功するのである。

女房の理想世界

作者は、物語の世界の人物に、己れの理想を具現化する。己れの、というより、女房たちの、と言ったほうがよいであろう。「源氏物語」は、作者紫式部が、その仕える一条天皇彰子中宮（皇后と同じ）の女房たちの理想を、具現化してみせたのだ、と思う。

物語は、姫に読まれる前に、女房たちの選択眼に及第しなくてはならないから、物語の内容は、女房たちの趣味、標準に外れてはならないのである。

「源氏物語」に書かれた世界は、後世ながく理想の世界と見られてきたので、平安時代の現実世界もあの通りと思う人もあったのだが、実は、女の胸に描く夢の世界であつたに過ぎず、さらにくわしく言えば、彰子中宮に仕える女房集団の理想とする所であつたのだ、と考えるほうが正しいであろう。それをこのように具現化し言語化し、文字に残したのは紫式部である。

「源氏物語」の成立年代

「源氏物語」はいつ作られたか。今、はっきり言えることは、た

だ一つ、寛弘五年（一〇〇八）十一月一日に、若紫の巻（第五巻、本書、一五一頁）が書かれ発

表され読まれていた、ということだけである。「紫式部日記」によって、このことをわれわれは知るのであるが、この日記は「源氏物語」の作者が書いたものであることは、その内容から明らかである。

「紫式部日記」の筆者は、一条天皇の彰子中宮に仕え、その父、左大臣藤原道長にも「源氏物語」の作者として歌をよみかけられている。一条天皇も女房に読ませてお聞きになり、「すばらしい学問をしている人だ。日本紀を読むこともできよう」と言われ、日本紀のお局とあだ名された。寛弘五年十一月一日は彰子中宮初産の皇子、一条天皇の第二皇子、のちの後一条天皇のご誕生五十日のお祝いの日で、当時の趣味世界の大御所藤原公任が「恐縮だが、この辺に若紫はおいでか」と声をかけた。以上の三つが「紫式部日記」に見える「源氏物語」についての記事である。これは、当時としてはたいへんなことであった。物語を男が読み、そのことを口に出して言ったのである。作者が大喜びで筆にしたのも無理はない。当時の物語は、女子供の楽しむもの、男は無視するものであったのだから。

ながく漢詩文のみを文学とする時代が続いていたし、和歌も十世紀はじめ「古今和歌集」の勅撰によってようやく漢詩文に准ずるものと認められるに至ったに過ぎず、仮名は仮りに音を写す記号であって、真の文字は漢字のみと思っていた時代である。仮名の物語、女房詞ことばの物語など、学問（当時はすなわち漢学である）あるものの取り上げるべきものでなく、まして批評などすべきものでなかったのである。「源氏物語」は、男が読み認め賞讃した最初の、また唯一の、物語であった。